ティーチングポートフォリオ

湘南医療大学保健医療学部看護学科

櫻井友子

作成日：2023 年 9 月 26 日

1.　教育の責任

私が所属する臨床看護領域は、看護学科において科目の単位数が比較的多く、また学生の卒業後の基本的な看護実践能力に影響を与える領域であると認識している。将来、看護師として日本の医療を担う人材を育成すべく、看護専門職としての基本的な知識・技術・態度を担当する授業（講義・演習・実習）を通じて、学生が身につけることができるよう教授していく責任がある。特に、臨床看護領域のクリティカルケアに身を置いているため、心身の変化が大きい急性期にある患者を守り、より安全なケア提供をするための基本的な能力を育めるよう力を尽くす必要がある。

また大学院教育においては、多くの学生が看護職経験を有しており、臨床現場における看護と研究をつなぎ、大学院生の看護実践力をより向上させることを通じて、現場の看護および看護学への貢献を図る責務がある。

本学での教育活動において、2023 年度に自身が担当する科目および役割は以下の通りである。

【担当科目（学部）】

- ナーシングスキル学Ⅱ（必修・2 年通年）※科目責任者
- ヘルスアセスメント学Ⅱ（必修・2 年後期）
- 看護基盤実習Ⅱ（必修・2 年後期）
- 成人看護方法論Ⅰ（必修・2 年後期）
- 成人看護方法論Ⅱ（必修・3 年前期）
- 成人看護方法論Ⅲ（必修・3 年前期）
- 成人看護学実習Ⅰ（必修・3 年後期）
- 成人看護学実習Ⅱ（必修・3 年後期）
- 統合実習（必修・4 年前期）
- 看護研究（必修・4 年前期）
- チーム医療論（必修・4 年後期）

【担当科目（大学院）】

- フィジカルアセスメント（選択・1 年前期）
- 生活支援医療学特論Ⅰ（選択・1 年前期）
- 生活支援医療学特論Ⅲ（選択・1 年前期）
- 生活支援医療学演習Ⅰ（選択・1 年後期）

2.　私の理念・目的

1)　私の理念

(1) 自主自立と自主自律の精神を育む

大学は高校までとは異なり、履修含め自身の大学生活は自身の責任において構築していく必要がある。看護学はそのカリキュラムの特性上、選択科目などの自由度は少ないが、そのよ

うな中でも大学生活において自身がいつ・何を学ぶべきか、自身の責任で考え、決定していく必要がある。また、大学は多くの学生がバイト等により社会生活を広げていく時期であり、学内での学びに加え学外での学びも重ねていく時期である。

学内外でのバランスをとりながら自身の責任において学びを深めることは、大学生活をより充実したものとするために必要であり、自立と自律を要する。看護基礎教育を学んでいる時期に得られる学内外での学びや経験は、その後の各人の看護観に影響を及ぼすため、学生へは自立・自律した大学生活を送れるよう指導していきたい。

(2) 看護専門職としての姿勢を育成する

看護は様々なチームで動いている。他職種間のこともあれば看護師間のこともあり、また患者の役割が大きいチームなど様々ある。それらを考える際、各人の役割や思いをおもんばかった立ち居振る舞いをする必要があり、そのような中で看護専門職としての役割を全うするには、必要な知識・技術をアップデートしていくことや、他者との円滑なコミュニケーション能力などが求められる。完璧な人間などいないが、学生自身が目指す看護師像に近づくためには、必要な能力がなんであるのかを考え続け、自己研鑽を重ねる必要がある。

2) 理念をもつに至った背景

私は学生の力を信じている。だからこそ、学生へは自身の目指す看護師像に向かって自立・自律した大学生活を送ってもらいたい。本学はチューター活動が充実しており学生が教員へ相談しやすい環境が整っている一方、教員に依存しがちになる学生も含まれている。Z 世代は少子化などの時代の流れより個が大切にされている一方で、自分で自分のことが決められなかったり、周りの大人が何とかしてくれるものと甘えている学生も含まれる。大学生という時間は青年期から成人期へ成長する時期であり、多かれ少なかれそのような感覚を持つ学生がほとんどであるが、質の高い看護職を要請するには自立・自律の精神を育み看護専門職としての姿勢を育成することが必要であると考える。それが本学看護学科の教育目的・目標・DP（資料1）にもかなうものであると考える。

3. 教育の方法・戦略

教育の方法・戦略については、その授業目標に応じて適宜考えているが、今回は前述の自立・自律の精神を育み看護専門職としての姿勢を育成するための取り組みについて記述する。

1） 目的・目標を明確にする

講義・演習・実習を問わず、授業においてはその目的や目標を示すことは当たり前であり、シラバスにも明示しているが、今何を行っているのか？その目的はなんであるのかを明確にするよう心がけている。グループワークや演習において、学生が何もせずにボーっとしていたり、意図とは違う取り組みをする、または遊んでしまうといった光景を見かけることがあるが、そういったときは学生から「今何の時間？」「何をするのか分からない」といった言葉を聞く。そういった際はたいてい、教員の指示が不明瞭であったり、学生の学修の進捗状況に合わない課題で

あったりする。

単純なことではあるが、指示を明確にするための言葉（発問）の選択や、同じことを 2 回繰り返し伝える、学生に何をするのかの確認をとるといった基本的なコミュニケーションをおろそかにしないことが肝要であると考える。また、課題が適さなくなった場合は準備したものに固執せず、学生と相談して変更するなど柔軟に対応をする。

看護学生はまじめな学生が多いので、「やるべきこと」が明確であればほとんどの学生は取り組むことができる。「いま」取り組む目的を明確にし、加えてその取り組みの結果が何につながるのかを段階的、長期的に示すことにより、「いま」の自分が何をすべきかを考えて行動することができるようにしたいと心がけている。

一方で、口では理解していても行動が伴わない学生に対しては、その行動に伴うデメリットが自身の責任にあることを明確にしておく。失敗の経験がなければ学習への意欲につながらない者もいるので、長期的な視点で見守っている。

2） 各学生に合わせた学習課題を明示する

講義においては難しいが、演習や実習など、個人の学生との関わりが増える授業においては、指導の際に学生が何に躓いているのかを知ったうえで、学生と相談しながら次に行うべき学習課題を示すようにしている。前述の通り、今何をすべきか常に明確に示すようにしているが、合わせて「何か困っていることがあるか？」はよく確認している。各学生の学習の進捗状況に応じて伝わる言葉が違うので、学生の個別性を考慮し、学生自身が考えて学習を進められるよう心がけている。

4. 学習成果

講義・演習においては各単元において学生からリアクションペーパーまたは感想・質問を書いてもらっており、「興味がわいた」「（既習学習について）繰り返し復習することが大事」などのコメントを各授業において頂いている。また質問に対しては、次回の授業または manaba にて回答し、学生の疑問に誠実に回答することで、次の質問を誘発することができた。

実習においては個人の評価ではなく科目の評価となるが、2022 年度成人基盤実習の臨地実習授業評価アンケートでは、すべての項目において 4 以上（5 段階評価）であった（資料 2）。一方で成人看護学実習Ⅰ・Ⅱにおいては記録量の項目において 3 コンマ代であり（資料 3, 4）、実習中の課題の課し方には課題が残る。

5. 改善のための努力

1） 教員間のより良いチームワーク

新カリキュラム科目において領域横断にて今までとは異なるチームで授業を担当することが多いため、より良いチームとなるよう努力したい。

2） 学生の個性・特徴を尊重する

自立・自律した学生を育てるためにクラス（集団）の特徴と、個の特徴を見極めて、その特徴に適した授業展開を目指す。

6.　今後の目標

領域横断の科目を運営するにあたり、情報伝達の祖語が生じることや各教員の関係性への配慮が必要であることが浮き彫りとなった。個の教員の努力はもちろん必要であるが、個が機能するためにはチームが円滑である必要があるため、今後の授業運営にあたっては以下を目標としたい。

長期目標：領域横断の授業展開ができるチームを形成する（新カリが 1 周するまで）

短期目標：各教員と良好な関係を築き、連絡調整の懸け橋となる（2023 年度内）

【資料】

1.　湘南医療大学保健医療学部看護学科 2023 年度シラバス
2.　看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果　成人基盤実習
3.　看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果　成人看護学実習Ⅰ
4.　看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果　成人看護学実習Ⅱ